

地域おこし協力隊だより



本市では現在、9人の地域おこし協力隊が地域活性化のため、それぞれの活動に従事しています。今月はその中から2年目の活動を迎えている4人の隊員に、これまでの活動内容などについて聞きました。

地域おこし協力隊に関する
問い合わせは
地域振興課地域振興係
(☎ 26-2276)

広大な大地を舞台に

飯沼さんは、令和3年4月に地域おこし協力隊に着任し、農畜産物処理加工施設でふかがわポークの加工品製造などに従事しています。

都内の高校に通っていた飯沼さんは農業に興味を持ち「北海道を舞台に実践的な農業が学べる」と拓殖大学北海道短期大学への進学を決め、深川市へやってきました。そんな飯沼さんは学生生活を送る中で、地域活性化などに幅広く携われる協力隊の仕事に魅力を感じたそうです。

多様な経験に感謝

「肉の加工は楽しくやりがいもあります。特に肉の形を整える成形という過程では、油を切り落とし、小さな骨を抜いたり、品質に関わる重要な工程のため、より注意深く作業をしています」と話してくれた飯沼さん。肉をさばくスピードが上がったことなど、自身の成長を感じる1年だったそうで、今



農業支援員
飯沼未樹さん

では在庫の管理業務も担うようになるなど、会社からの信用が伺えました。

昨年、京都で行われた物販イベントへ4回出向き、自分たちが作った加工品を直接販売した飯沼さんは「慣れない物販でしたが、お客様から『前に買っておいしかったからまた来たよ』と言われたことがうれしかったです。会社には、社会人2年目の自分にも、さまざまな経験をさせていただき感謝しています」と充実した表情で話してくれました。

工夫したPRを

初回の物販で買い手の視点から物事を考えることの大切さを感じた飯沼さんは、各部位のおすすめの食べ方を示したパンフレットを自作し、2回目以降の物販から配布したそうです。「評判がよく、やってよかったです。これからもふかがわポークの良さをより多くの人に知ってもらえるよう工夫しながら活動していきます」と力強く語ってくれました。

魅力あるまち深川

「自然に囲まれた場所で農業に携わってみたいと思っていました」と話してくれた中村さん。中村さんは、令和3年4月から地域おこし協力隊に着任し、(株)深川未来ファームでキュウリの栽培などに従事しています。

インターネットで見つけた深川市の移住企画に参加した中村さんは「自然の素晴らしさと食べ物のおいしさに感動しました」とその魅力を知り、本市に移住することを決断したそうです。

より多くの知識を

昨年の経験を活かしながら、キュウリの栽培に従事してきた中村さんは、ハウスの温度調整などについて意見を提案するなど、栽培方法をより深く考えるようになりました。「今年により充実したキュウリ作りが出来ました。空だったコンテナにキュウリがパンパンに詰まって、それが夕方には何段にも積まれている



農業支援員
中村洋さん

くのを見た時、1年間頑張ってきた良かったと実感しました」と微笑みました。

また、キュウリの栽培の傍ら、さまざまな作物の栽培知識を得るため、会社の敷地を借りて自主的にトウモロコシの試験栽培を行った中村さんは「協力隊の任期終了後も、このまちで農業に携わっていきたくて思っています。そのため、より多くの知識を習得するチャンスは逃さず、栽培スキルの向上に務めていきたいです」と熱い思いを明かしてくれました。

築き上げたものを大切に

中村さんは、農業に関する研修会や農村青年部との懇親会などに積極的に参加し、出会った人との関係性を築き上げてきました。「この先も深川市で働く上で必要なことだと思っています。このつながりを大切に、みなさんにおいしい作物を届けられるよう、残りの任期を全うします」と将来への意気込みを語ってくれました。



地域振興支援員
森田純幸さん

自分にピッタリの深川

本市を代表する特産品「ふかがわシードル」の製造に興味を持った森田さんは令和3年5月から地域おこし協力隊としてアツプルランド山の駅おとえに務めています。

自身が酒好きで、醸造にも興味があったこと、趣味のスキーボードが楽しめるところに住みたいと考えていた森田さんは、条件がマッチする深川市へ移住することを決めました。「酒造りは初心者で不安でしたが、自分の夢もありました。深川市は自然豊かで過ごしやすく本当に来てよかったです」と柔らかな表情で語ってくれました。

心の寄り添う活動を

周囲から必死に酒造りの技術を学び、知識をつけていった森田さんは「お酒は成分の数値や温度の微調整がとてもしびやで難しいですが、その分、完成した時の達成感があります。特に果汁同士を掛け合わせるブレンド

活動の集大成に

「来年は、シードルをよりよい商品にするため、他の醸造施設の視察に行くほか、協力隊として最終年を迎える集大成に新商品の開発に取り組んでいきます」と大きな目標を語ってくれた森田さん。最後に、市民のみなさんへ「在庫があればシードルやジュースの試飲もできるので、ぜひ山の駅へ遊びに来てください」と笑顔で呼びかけられました。



農業支援員
石井優人さん

新規就農を夢見て

石井さんは、令和3年4月に地域おこし協力隊に着任し、(株)深川未来ファームでトマトの栽培などに従事しています。

東京で育った石井さんが農業に興味を持ち始めたのは小学生の時だったそうです。「学校行事の米作り体験に毎年希望して参加していました。収穫した米は餅にして家族で食べることが恒例となり、それがとても楽しかったです」と温かいエピソードを打ち明けてくれました。その後、進学した農業高校の課題研究で栽培した野菜を周囲に振る舞ったところ好評で、その時の気持ち忘れられず、本格的に就農の道を志したそうです。

今できる最大の恩返しを

石井さんに来年の目標を伺うと「二人前の農家になるため自信をつける1年にしたいです。そして、自分を受け入れてくれたみなさんの食卓へおいしい野菜を届け、笑顔の輪を映かせることが最大の恩返しだと思おうので、ラスト1年の任期を全力で活動します」と力強く語ってくれました。

深川の地でステップアップ

十勝の専門学校へ進学した石井さんは、在学時に参加した企業説明会で深川未来ファームを知ります。「高校生の時から将来はミニトマトの栽培をメインに新規就農したいと考えていた